

テーマ:三方よしの行政に近づくために — 県庁が「より気づける組織」として進化するには

作成:2025年6月3日

発表者:田口真太郎(成安造形大学/NPO法人ナイマゼ)

【1】自己紹介:滋賀で“翻訳と共創”の現場に立ち続けて

- 成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 研究員/NPO法人ナイマゼ 代表理事
- 教育・行政・市民の“あいだ”に立ち、見えない課題を翻訳し、共に考える活動を展開
- 実践フィールド:近江八幡市(文化的景観保全・子育て支援)、大津市(こどもパブコメ)、高島市(中学生のまちづくり参加)、竜王町(こども若者会議)、県内高校・大学(非認知能力・探究力を育む授業開発)

【2】問題提起:県庁は「より気づける組織」へ:住民と政策をつなぐ“感度”をどう育てるか?

- 声を“受け取る”仕組みはあるが、「聞いてもらえた」と感じられない現状
- 「制度はあるが、関係がない」状態で、意見は届かない
- 今必要なのは、“耳を持つ”だけでなく、“翻訳して返す力”

【3】現場の実践から見たヒント:「翻訳と熟議」のプロセス

- **大津市「こどもパブコメ」**:300事業 → 絵とわかりやすい言葉に翻訳 → 子どもから100件以上の意見収集
- **竜王町こどもまんなか会議**:子どもたちが熟議を重ね、夢物語から実現可能な提案へ
- **美大授業改革**:学生に“共感と翻訳のスキル”を育成し、地域の声を図解・可視化(→書籍化)

【4】“構造化する技術”としてのデジタル民主主義

- **ブロードリスニング**:SNSや意見をAIで分類・構造化→対話の呼び水に
- 民意の見える化と熟議をつなげる“合わせ技”として活用可能([Talk to the City](#)の活用)
- 滋賀の“ちょうどいいスケール感”と“対話文化”との親和性が高い

【5】滋賀での実践可能性:モデルの具体化

- 子ども政策:わかりやすい言葉・絵+熟議で、→「意見を言えた」から「関わる」へ
- 多世代参画:ブロードリスニング+ワークショップで、意見の蓄積から自治感覚の醸成へ
- 交通・福祉:ビジュアル対話+住民参加で、共通理解・納得の形成プロセスをデザイン

【6】滋賀での実践可能性、もう一步先へ:子ども・若者が政策を“選ぶ”経験を

- 例:パリ市の**参加型予算(Budget Participatif)**では、子どもも投票参加(模擬ではなく実参加)
- 滋賀でも「こども選択予算枠」のような、**意見→熟議→投票→結果反映**の仕組みが試せるのでは?
- 「発言できた」で終わらず、「届いた」「変わった」と実感できるサイクルを

【7】越境する職員たちと、新しい公務のあり方

- 滋賀県でも、「おたがいさま・おかげさまバンク」「施策活性化チャレンジ」など、**部局を越えて動ける仕組み**の芽生え
- こうした動きは、「自治体戦略2040構想研究会」が提言する、職員が定型業務から解放され、**地域とつながる“企画型・共創型人材”**への転換とも重なっている。
- → “越境する”とは、**制度を離れるのではなく、責任を持ってつながりに出ること**。それは“県庁力”の新しいかたち。

【8】まとめと呼びかけ:「三方よしの行政」を本気で実装するために

- 「県民のために」から「県民と共に」へ。今こそ、県庁は「**プラットフォーム・ビルダー**」の機能が求められている。
- 職員の役割は「一方的にサービスを届けること」から、「異なる立場の人々の声を翻訳し、つなぎ、共に解決を考えること」へと変化していく。
- 翻訳者・共感設計者・ファシリテーターとしての機能を、組織にどう埋め込むか。
- まずは、**それぞれの部局で「今、どんな声に聴いていないか?」を問い直すことから始めたい。**